フィールドで考える

ジンに憑かれたベルベルの助産婦

井家 晴子（いのいえ はるこ）

東京大学大学院総合文化研究科

ある助産婦の不思議

モロッコ王国のオートアトラス山中の村に、ヤムナ（仮名）おばさんは住んでいる。彼女は、ベルベル語やアラビア語のモロッコ方言でカブラといわれる助産婦である。彼女が介助して生まれた赤ん坊は、利発ではあるがおしゃべりになるという評判であった。子どもの性格は、その緒を切ったカブラの性格に似るとされるからである。彼女は、夫と一〇年前に別居していたが、三人の子どもはいずれも立派に成長しすでに独立していた。それに老いた両親の面倒は弟夫婦が見ていたし、ときおり、大都市マラケシュに出ては、知り合いのつてで家政婦をして現金収入をえるなど、その暮らしは気楽なものに見えた。

彼女は人づきあいが好きだった。また手際よく家事をこなすので、村人からも出産のときだけではなく結婚式、葬式、祝祭などの際には頼りにされていた。行事があるたびに無料のカメラマンとして呼ばれるのが常であったわたしも、しばしば彼女と顔を合わせた。夜はひとつの部屋に女たち同士で川の字のようになって眠る。そんなとき、彼女は夜中に何度も寝言を言い、飛び起きて灯を点し、神に何か祈ることさえあるので、わたしは繰り返し睡眠を妨げられた。

じつはこれ以外にも、彼女には不思議な点がいくつかあった。まず、話好きでとくに人の昔の話を好んでするのだが、自分の昔についてはほとんど語らない。たいがいの女性たちは自分の辛い過去の思い出も話すものだ。彼女にとっては、子ども二人を病死させたことがどうしても思い出したくない深い傷なのだと、一応わたしは理解していた。

また、夫婦仲がうまくいかず遠くで別居する夫が一〇年ほど経っても離婚を言い出さないばかりか、再婚も考えていないのも気になっていた。しかも、彼女の老いた母親が自らの苦渋に満ちた人生を語る際、今でも彼女のせいで気が休まらないのだと、なぜか必ず言い添える点も不思議であった。

精霊が起こした不幸な事件

突然、これらの疑問はすべて明らかになった。ある日、わたしは彼女の伯母に、自分の身体をどのように理解しているのか、質問をしていた。伯母は「人間と動物は何から何まですべて同じ。心臓も肝臓も胆嚢（たんのう）も大きさが違うだけで同じだから、羊を解体したときに見ればよい」と答えた。「動物は解体して実物を見ることができるが、人間の内臓は見たこともないのに、なぜ同じだとわかるの」とたずねると、伯母は、「ヤムナの死んだ子どもとその内臓を実際に全部見たから知っているよ」と答えた。わけがわからず驚いていると、彼女は説明してくれた。

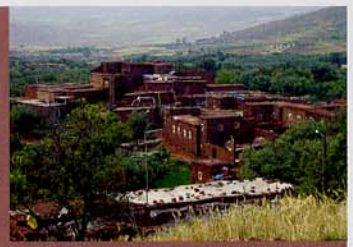
ある晩、ヤムナおばさんは突然、ジンとよばれる精霊に憑（つ）かれた。そして横に寝ていた長女を鶏と混同してしまった。そこで鶏の下処理をするのとまったく同じように、寝ている長女の内臓を下半身の方からすべて引き出した。その後、彼女はフラフラとモスクへと出て行った。目を覚ました次女は自分の姉が死んでいるのを見て、母に問いただそうと追いかけた。彼女には、追いかけてきた次女も鶏に見えた。そして、鶏が自分を襲ってくるように感じ、押さえつけて息ができないようにして殺してしまったのである。その様子を見ていた近所の人が警察を呼んで、逮捕され、彼女は精神病院に入れられた。退院後は夫と別居し村へと帰ってきたが、彼女には事件の前後の記憶がまったくない。

夫が現在も離婚せず、再婚もしないのは、そのせいであると伯母は言った。人間は誰でも、ジンに憑かれる可能性がある。自分と再婚した相手が、またジンに憑かれて、自分の子どもを殺してしまうとも限らない。そのため、彼はずっと独身でいるとのことであった。

不運に同情する村人たち

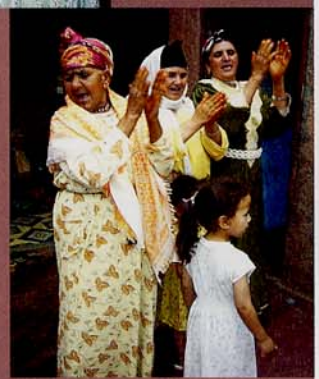
ヤムナおばさんの過去を聞いて、わたしは彼女と一緒にいることさえ恐ろしくなった。そういえば、行事の際に遠方から来る村の出身でない人たちが、ときおり彼女に好奇な視線を向けるのが、ずっと早くから気になっていたものである。しかし、村人は彼女への非難を口にせず、何事もなかったように扱い、それどころか頼りにさえしながら日常生活をともに送っていた。わたしがそれを不思議に感じ、村人たちにあらためて彼女の事件について聞くと、彼らはむしろジンに憑かれた不運な彼女に同情し、ジンの恐ろしさとそれに抗（あらが）えない人間の非力さを嘆いていた。

近代医療では、このような事件は精神疾患によるものとみなされる。そして、何故彼女がそのような事件を起こすに至ったのか、専門家は犯行者の幼少期からの生活環境に焦点を当てて分析する。しかしその分析による動機の説明が第三者を納得させられるとは限らず、事件を起こした当人への怒りがそれで収まるわけではない。村人はこれからも何でもない日常生活のなかで世話好きなおばさんとの関わりを続けていけるだろう。いったい近代医療の知見に基づく精神分析が、彼らにとってどんな意味があったのだろうか。不運にもあの事件時、彼女にうかがい知れない力が外から働いたのだと考える方が、わたしにもしっくりくるのである。

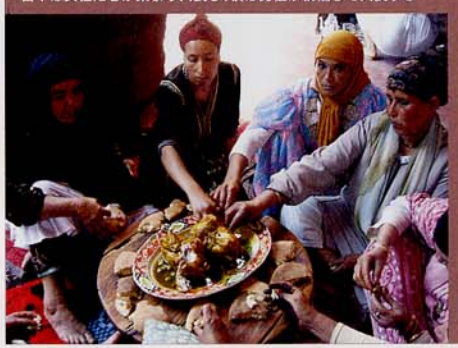


ベルベルの村。
村内から切り出した
石で建てた家が並ぶ

都会で暮らす現代的なベルベル人の結婚式。
新郎新婦の左右で伝統的な髪飾りをつけているのは
村から祝いにやってきた女性



産後3日目の祝い。
喜ばしい行事には
女たちが集まり歌って踊る



産後7日目の祝い。
日中は女性たちが集まり共食し、夜は男性が祝福して共食する